2024年（令和６年）
12月号（No. 955）
公益社団法人
日本山岳会
The Japanese Alpine Club
定価１部　150円
会員の会報購読料は年会費に含まれています
URL●http://www.jac.or.jp
e-mail●jac-room@jac.or.jp

令和６年度年次晩餐会を開催
記念講演会には天皇陛下がご臨席

12月7日、東京・新宿の京王プラザホテルにて、令和6年度の年次晩餐会が開催された。記念講演会には天皇陛下がご臨席くださり、創立120周年記念事業「グレート・ヒマラヤ・トラバース」の報告や、秩父宮記念山岳賞を受賞された京都大学名誉教授・酒井治孝氏や信州大学名誉教授・中村浩志氏による講演などが行なわれた。

■橋本会長挨拶「多様性を重視した取り組みを推進」

日本全国の名山の名が付けられた39のテーブルに、各地から集まった319名の会員およびその同伴者が着席すると開会となった。

冒頭、橋本しをり会長より次のような挨拶があった。

「この1年、各地の山岳祭や記念式典に参加して、各支部の地域に根ざした特色ある活動が、日本山岳会の組織全体を豊かにしていると実感した。この想いから、今回の晩餐会では支部同士の交流を促進するため、テーブルの配置を工夫した。」

「現在、本会では『みんなの山岳会』という理念の下、多様性を重視した取り組みを進めている。若者支援では、海外登山を通じて新たな可能性を切り拓くための環境整備を推進。高齢化社会に対応するため、『人生100年時代の安全登山』を掲げて、会員の方々の知見を活用すべく、アンケート調査を実施する。また、女性リーダーの育成にも努めている。」

「創立120周年記念事業としては、全国山岳古道調査、コーカサス・プロジェクト、引き継がれる山岳祭、グレート・ヒマラヤ・トラバースなど、多岐にわたる13のプロジェクトを展開している。来年は120周年を迎えることになるが、本日の集いが、これまでの歴史を振り返り、未来への新たな一歩を歩み出す機会となることを願っている。」

■物故会員への黙祷と新永年会員・新入会員の紹介

この1年間に亡くなった70名の物故会員に黙祷を捧げた。会場では5名のお名前と経歴を紹介した。木崎甲子郎さんは北海道大学山岳部出身。大学で教鞭を取り、地質の分野で多くの業績を残されたほか、南極越冬隊にも参加した。山口節子さんは日本山岳会婦人懇談

橋本会長からバッジを授与される新永年会員の小林政志元会長

目　次

令和６年度年次晩餐会を開催
記念講演会には天皇陛下がご臨席 …1
現役学生５人の混成チームで挑み
未踏峰プンギ全員登頂 ……4
槇 有恒碑前祭（10月27日）……7
宮崎ウェストン祭（11月３日・４日）…8
木暮理太郎翁を偲ぶ会（11月３日）…9
山の名著再読 ……10
本会橋本しをり会長が米国の
山岳雑誌『Alpinist』に登場 ……12
東西南北 ……13
活動報告 ……15
新入会員 ……17
会務報告 ……18
ルーム日誌 ……18
会員異動 ……19
編集後記 ……19

▶日本山岳会事務（含図書室）取扱時間
月～金 …… 10～20時
第1、第3、第5土曜日 …… 10～18時
第2、第4土曜日 …… 閉室

山岳賞を受賞された中村教授（右）と酒井教授（左）。中央は橋本会長

会の活動を通じて、終戦直後に多くの会員に生きる希望と勇気を与えてくれた。大石惇さんは第5代静岡支部長を12年間務め、ヒマラヤの未踏峰に足跡を残してきた。小池潜（ひそむ）さんは北アルプスの双六小屋などを経営し、いつも温かく登山者を迎えてくれた。山岳写真家としても活躍し、数多くのすばらしい作品を残してくれた。中島健郎さんは、平出和也さんとともにヒマラヤで数々の未踏ルートを登攀。これからが期待される若手クライマーのひとりだったが、K2西壁へのチャレンジ中に滑落事故により亡くなった。

次に新永年会員が紹介された。令和6年度の新永年会員は48名。そのうち14名が晩餐会に出席し、壇上で永年会員バッジと記念品が授与された。

続いて新入会員が紹介された。今年度は正会員180名、準会員59名、合計239名を新入会員として迎えた。晩餐会に出席した18名が登壇すると、会場からの盛大な拍手で迎えられた。

■2人の研究者が秩父宮記念山岳賞を受賞

令和6年度の秩父宮記念山岳賞は2名の研究者が受賞した。ひとりは京都大学名誉教授の酒井治孝氏で、業績はヒマラヤ山脈形成史の研究。もうひとりは信州大学名誉教授の中村浩志氏で、業績は中央アルプスにおけるライチョウ個体群復活プロジェクトの推進。挨拶に立った酒井氏は「ヒマラヤに憧れて63年間、調査を開始してから44年間。この間、研究に邁進してきたが、ヒマラヤ山脈は未解明なことがまだ山積している。今回の受賞を励みに、これからも研究に励んでいきたい」と抱負を語った。中村氏は「5年間という短期間で130羽まで繁殖させることができた。こうした成果が得られたのは、恩師の羽田健三先生の30年間の研究がベースになっている。また、今回の復活事業は多くの方々の協力を得て、はじめて成し遂げられたこと」と関係者への感謝を述べた。

■高額寄附者への感謝状贈呈と2つの海外登山隊の隊員紹介

次に、高額寄附者への感謝状の贈呈が行なわれた。壇上に上がったのは本年度の新入会員でもある上原充会員。寄附の趣旨について、「中学生のとき、父に連れられて八ヶ岳を登って以来、現在まで山登りを続けてきた。これからも日本山岳会が存続し、日本の山岳文化を守ってもらいたい。そういう想いで寄附をさせてもらった」と語った。

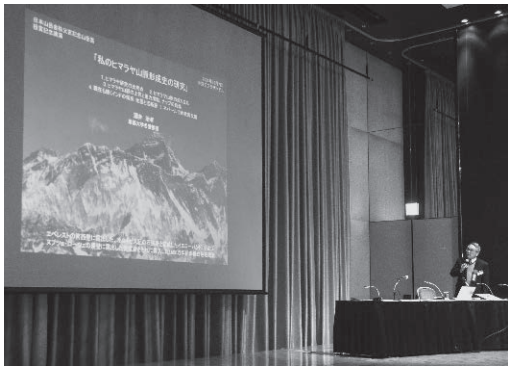
今年、ヒマラヤの未踏峰に初登頂した学生部プンギ登山隊とヒマラヤキャンプ隊の隊員紹介も行なわれた。プンギ登山隊で総隊長を務めた青山学院大学山岳部・井之上巧磨会員は、「山と仲間、そして運にも恵まれて、未踏峰に登頂できた。学生だけの力で登れたことは、我々の人生において、すばらしい経験になった」と現在の想いを語った。

西ネパールのサンクチュアリ・ピークに初登頂したヒマラヤキャンプ2024年隊はリーダーの松本歩美会員が挨拶に立ち、「BCまでのキャラバンでは当初の予定とは異なるルートを進み、ワイルドな登山となった」と未踏峰登山ならではの楽しさと難しさを語った。

晩餐会に出席、壇上で紹介された18名の新入会員

■乾杯の発声は新永年会員の髙原三平会員

恒例の鏡開きは、橋本会長のほか、古野淳前会長、秩父宮記念山岳賞受賞者の酒井氏と中村氏の4名で行なわれた。お酒は、15代会長・故今西壽雄名誉会員ゆかりの「四海王」。乾杯の発声は新永年会員の髙原三平会員。「本会の繁栄のために何をすべきか、新永年会員も一緒に考えていきたい。今日の晩餐会でその自覚を新たにした」と感慨を述べ、声高らかに音頭を取った。その後はテーブルごとに会員同士の交歓を行ない、料理とお酒を堪能した。会の終わりには33支部の紹介があり、盛況のうちに閉会となった。



パワーポイントを使って講演される酒井治孝教授

晩餐会に先立って記念講演会が実施された。ご臨席くださった天皇陛下は全ての講演を熱心にお聞きになられていた。講演が始まる前には、駐日エクアドル特命全権大使セサル・アウグスト・モンターニョ・ウエルタ氏より、創立120周年記念事業として実施された友好合同登山について、お礼の言葉が述べられた。

【記念講演会】

創立120周年記念事業「グレート・ヒマラヤ・トラバース」報告

重廣恒夫会員、吉井修会員、飯田邦幸会員、中村佳子会員

6回目となる24年秋隊では、インド・ヒマラヤの踏査を行なった。今回は、1976年に日本山岳会隊が世界で初めて東峰から主峰への縦走を行なったナンダ・デヴィの山域に入ったこともあり、講演前半ではナンダ・デヴィ隊のメンバーであった重廣会員より、48年前の登山の様子が写真とともに語られた。

さらにヒンズー教三大聖地の巡礼やダラムサラ訪問の後は、ラダックにそびえるカンヤツェⅡ峰の登頂を果たした。

秩父宮記念山岳賞受賞記念講演

「私のヒマラヤ山脈形成史の研究」

酒井治孝氏（京都大学名誉教授）

冒頭、小学生のときに見たイタリア隊のK2初登頂の記録映画がヒマラヤに興味を持つきっかけになったこと、青年海外協力隊員としてトリブヴァン大学の地質学科の講師を務めたことで本格的にヒマラヤ研究に取り組むようになったことなど、酒井氏の来歴が語られた。

講演の中盤では、ヒマラヤ山脈を構成する地質帯の概要や起源、ヒマラヤの高峰に記録された山脈の上昇と冷却、重力滑動とナップの前進についての解説など、これまでの研究成果を発表。最後に、酒井氏が研究と並行して長年取り組んできたネパールへの教育支援活動について紹介された。

秩父宮記念山岳賞受賞記念講演

「甦った神の鳥　雷鳥」中村浩志氏（信州大学名誉教授）

1969年を最後にライチョウが絶滅した中央アルプスで2018年、半世紀ぶりに1羽の雌ライチョウが確認された。これを契機として中央アルプスにライチョウを復活させる事業が始まり、その企画から現場での作業までの総指揮を執ったのが中村氏である。

計画の1年目は、乗鞍岳でのケージ保護によって人の手で守られて育った19羽をヘリコプターで中央アルプスに運んで放鳥した。以降、人が保護をしながら繁殖を見守り続けた結果、中央アルプスのライチョウの数は毎年2倍ペースで増え、2024年には130羽が繁殖するまでになった。

特別講演「夜の山に抱かれて撮る山岳夜景」菊池哲男氏

菊池氏は山岳写真家として、雑誌『山と渓谷』の表紙や巻頭グラビアで作品を発表し、数多くの写真集を出版してきた。講演ではこれまで撮ってきた作品を紹介しながら、撮影のポイントやこだわりを解説するほか、撮影裏話も語られた。フィルムからデジタルに変わったことで夜景撮影の可能性が広がった、という話は興味深かった。「世界各地の山を撮ってきたが、日本の山は一番美しい」という菊池氏の言葉が印象に残った。

（文：谷山宏典、写真：奥田有恒）

REPORT

現役学生5人の混成チームで挑み 未踏峰プンギ全員登頂

総隊長　井之上巧磨

◆隊名：日本山岳会学生部プンギ遠征隊
◆目標：ネパール・ヒマラヤ、アンナプルナ山域のペリ・ヒマール山群、プンギ（6524m）
◆期間：2024年9月5日～10月31日（58日間）
◆隊員：井之上巧磨（青山学院大学山岳部）、尾高涼哉（東京大学スキー山岳部）、横道文哉（立教大学山岳部）、中沢将大（同前）、芦沢太陽（中央大学山岳部）

未知なるものを既知なるものへ

10月4日。明日でいよいよ出国から1ヶ月が経とうとしていたとき、我々はパックリと開いた氷の裂け目を前に、気力も体力も限界の状態で立っていた。場所は標高6100m。当初計画していたハイ・キャンプ（HC）の位置のプンギ・サウス（南峰）は、標高差で100m上にある。しかし、それを塞ぐようにクレバスが横たわり、無情にも太陽は西の峰々へと沈み始めている。行動時間は14時間を超えていた。

このプンギ遠征隊が立ち上がったのは、1年半前に遡る。未知なるものを既知なるものへと変えていくような登山がしたい。そして、この遠征を通して大学山岳部および日本山岳会学生部の認知度を向上させたい。そんな目的を胸に抱いて計画を立て、集まったのが5人の現役学生たちだった。全員が出身大学は違うものの、山に懸ける情熱と技術を共有できる仲間である。

できる限り自分たち学生主体で行動しようと計画を立て、昨シーズンの冬は、ほとんどを一緒に雪山で過ごした。残雪期はクレバス・レスキューの訓練を行ない、夏は富士山や山小屋で働いた。トレーニングとアルバイト、遠征計画の確定に追われているうちに、あっという間に1年半という月日は流れ、9月5日、ついに我々は羽田を出発した。

出国から17日目にBC入り

初遠征ということもあり様々なトラブルを想定していたものの、EMS（国際スピード郵便）で送った荷物の関税が16万円かかったことや、円安で想像以上の節約旅になったことを除けば、行程は順調に進んだ。9月10日、カトマンズを出発すると、日本では考えられないような悪路を蒸し暑いバスに揺られ、10時間かけてベシサハールへ。ベシサハールでジープに乗り換え、崖ぎりぎりの細い道を6時間走ってコトに着いた。ネパールで一番辛いのは何かと聞かれれば、この車移動は間違いなく上位にランクインするだろう。

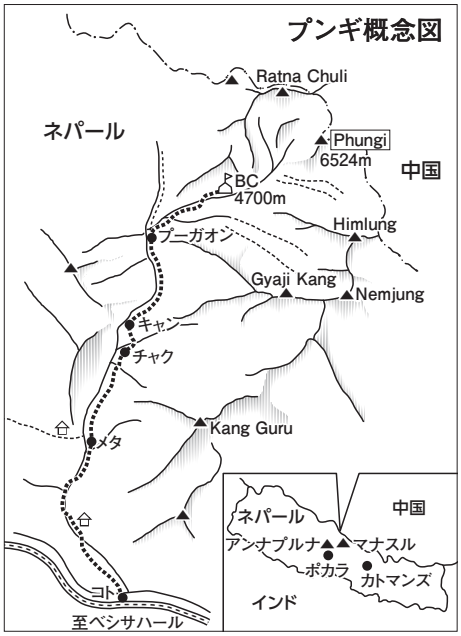
コトからはいよいよトレッキングが始まった。日本に1つあったら目玉になっているのではないかと思うような、延々と続く水平歩道や岩壁を横目に進んでいく。高所経験に乏しい我々は、原田智紀さん（学生部担当理事）にアドバイスをいただき、順化にかなりの時間を使おうと決めていた。コトから3つの村に泊まりつつ、停滞日をそれぞれにとってゆっくりと高度を上げた。ベース・キャンプ（BC）に入ったのは9月21日。出国から実に17日目のことだった。

今回、我々のBCまでのガイドとBC設営および行政手続きを頼んだのが、青山学院が昔から使っ

C2上部から見た山頂へのルート。稜線中央がHC

ているJanak Chuli Treks Pvt Ltdである。決して有名ではないエージェント会社であったが、BCに到着して、我々はその仕事ぶりに驚かされた。BCには我々用のテントとマットがそれぞれ用意され、トイレテントやダイニングテント、キッチンテント、シャワーテント（雪で倒壊して使用方法は不明）があった。また、コックさんは日本食に精通しており、すき焼きでもトンカツでも、その場にある材料で完璧な日本食を作ってくれた。

BCで改めて装備を厳選し、9月24日、C1に向けて出発する。ここから先は5人だけでの行動である。ガレた谷の底を3時間ほど歩いて着いた台地にC1を設置した。



「C1までは特に問題もないなぁ」などと思っていた夕方、突如として大雨が降り始め、それは夜に雪へと変わった。

朝になっても雪は弱まる気配がなく、仕様がないのでBCへと撤退する。雪はその後1日半降り続けた。やんだ後も雪崩がひどく、我々が次にC1へ出発できたのは、雪がやんださらに3日後のことだった。いつもどおり谷底を歩いていると、谷の上部で砂埃が舞った。すかさず「ファーク」と叫び、走って逃げる。振り向くと、ちょうど先ほどいた場所の数十m先に、軽自動車大の岩が落ちてきた。その後、より一層上部に注意を払いながらC1に着くと、大雪によりテントが倒壊していた。ここまでの降雪と予想しておらず、ポールを抜いておかなかったのが原因だった。朝のタイミングでBCへ早く降りないと、という焦りもあって、頭が回っていなかったのだ。

翌日、徒渉を交えながら標高を稼ぎ、5500mの台地にC2を設置した。我々はカミナドーム4型を5人で使用している。カミナ4は軽くて丈夫で広いのだが、さすがに4人用テントに5人で寝ると狭い。全員が座るか、互い違いに寝るしかなかった。ただその分暖かく、寝袋のスペックがかなり有効だった。

第1次アタックは失敗

10月4日。日の出前にテントから這い出し、プンギ・サウス（南峰）を目指して第1次アタックが始まった。順化が上手くいき、人数も多いので脛丈（すねたけ）のラッセルをテンポ良く回していると、いつの間にかプンギ・サウスより西に延びる尾根上にいた。プンギ・サウスのウエスト・リッジと名付けたこの尾根は岩稜となっており、とにかく脆い。左の沢に降りることも考えたが、谷に降りるにもリスクがあり、何より「5800mでアルパイン」という言葉に誘われて、そのまま突っ込んだ。

最後にある赤岳・主稜のようなチョック・ストーン越えが核心。これを越えてしばらく行くと次第に傾斜は角度を増し、雪壁へと変化する。「この壁を登り切ったら、今日はおしまいだ！」などと希望的観測を胸にアックスとアイゼンを機械的に駆使していると、ついに雪壁を乗り越えた。「終わったぁ」という達成感とともに目に飛び込んできたのは、横にずっと続くクレバス帯だった。終わった。サウスは標高差で100m上である。全く予想してない場所でのクレバスの出現。精神的にも肉体的にも辛かった。絶望していても仕様がないので、その場にHCを設営しながらルートを探った。

ルート工作に難航した6200mのクレバス帯

第１次アタックの敗退地点から山頂に続くナイフリッジ

いよいよ太陽が隠れ始めたころ、クレバスを縫うように走る細い氷の道を見つける。いつ崩れるか知れないが、行くしかない。最後の力を振り絞ってフィックス・ロープを１００ｍ張った。クレバスの突破工作が終わり、ＨＣに半ば倒れ込むように転がり込む。雪を溶かして水を作り、お湯にする。この地点で標高６１００ｍ。酸素は平地の半分しかない。時間が経つにつれ高度障害の頭痛が出てきた。

合計で15時間動き続け、かなりのカロリーを消費しているはずなのに、全く食欲もわかない。なんとかスープを1杯だけ飲み、明日に備えて寝袋に潜り込んだ。外はマイナス20℃ほどで、テントは凍りつき、室内の結露が霜となり雪のように舞っていた。筋肉は熱を持ち軽く痙攣しているが、寝返りすら打てない。頭痛もひどく、かといって寝ても解決しない（寝ると呼吸が浅くなり、高度障害が進行する）のが分かっているから具合が悪い。起きてても地獄、寝ても地獄。のちに我々はＨＣを「雪と氷の監獄」と名づけた。

10月5日。昨日苦労した甲斐もあり、朝一番でクレバス帯を突破し、対岸の壁に取り付くことができた。しかしながら、そのままサウスに直登することはできず、サウスとプンギのコルに向かってトラバースをして行く。息が上がるのが早く、スピードは悲しいまでに上がらない。コルに出てやっと尾根に乗った。プンギが目の前にデカデカとあり、山頂が近づいている実感がわいてくる。その後尾根幅は次第に細くなり、スノー・リッジへと変わった。ロープ・スケールで3ピッチほど行くと、尾根が15ｍほど切れ落ちていた。クライム・ダウンはできず、ここを降りるには懸垂するほかない。しかしながら、フィックス・ロープは要らないと判断し、クレバス帯に置いてきてしまった。帰路ユマーリングするためにも、懸垂するには残置ロープが必須である。メインロープは切りたくなかった。時間もお昼ごろとなり、厳しそうである。こうして我々の第1次アタックは失敗に終わった。

仲間たちと勝ち取った頂

翌日、ＢＣまで一気に下山する。下降中、プンギ・サウスのウエスト・リッジの横の沢は、リスクはそれほど高くないことが分かった。頑張って登ったのに、現実とは無情である。そんなこんなでボロボロの体を引きずるようにしてＢＣへ戻った。

３日間の休憩を挟み、10月10日、第2次アタックを開始する。1日でＣ2まで上がり、翌日、コルまで行ってＨＣを設置した。10月12日、溺れそうなほどの星空の下、テントを出発し、敗退点で懸垂を行なう。その後も長く続くスノー・リッジと雪壁を慎重に処理しながら、真っ白な雪面に足跡を残した。午後0時19分、ついに我々はプンギの登頂に成功した。嬉しい気持ちと、とんでもない所に来てしまったという恐怖が交錯する、不思議な感情だった。写真を撮り、ガーミンで留守本部に連絡を入れて10分ほどで下山を開始した。ＢＣに帰ったのは、翌日の 14時のことだった。

今回、すばらしい山と仲間、そして運に恵まれ登頂することができた。自分の歩む一歩一歩が、人がそこを歩いた初めての一歩であり、僕たちの通った所が道（ルート）となる。情報が溢れる現代において、それがないこの山を学生だけで登れたことは、何ものにも替えがたい、すばらしい体験だったと思う。また、ロープを結び合い、命を預け合える、深い絆で結ばれた仲間ができたことも嬉しい。

大学山岳部の全盛期は過ぎ去り、全体的に下火の傾向がある現在、この登頂を通して世間の大人たちに「大学山岳部は、今も青春を山に懸けているのだな」と、そして高校生たちに「山っていいな」と思ってもらえたら、僕らの遠征の一つの意義になるのではないかと思う。

壮麗なヒマラヤの山々と、私たちを支え、応援してくださった全ての方々に感謝を申し上げたい。

創立120周年記念事業■引き継がれる山岳祭12

槇 有恒碑前祭（10月27日）

北九州支部副支部長　横山秀司

10月27日(日)、第8回槇 有恒碑前祭が北九州市門司区の風頭（かざがしら）（362m）で、約40名の参加者を迎えて執り行なわれた。午前8時に門司港駅に集合した参加者は、曇天の中、風頭に向けて約1時間半の登山を開始した。

碑前祭の行なわれる風頭には、槇の詩文が刻まれた石碑が立っている。1956年、マナスル初登頂に成功した槇は、成功の報告と支援のお礼のため、57年に毎日新聞社西部本社を訪れた。その折、地元の風師山早朝登山会の堤甚五郎会長（JAC会員番号4162）が槇を風頭に案内した。後日、関門海峡の眺めのすばらしさに感激した槇からお礼の詩文が送られてきた。

詩文が刻まれた石碑と略歴碑

この頂に立つ　幸福の輝きは
これをとらふる　術を知りし
山人たちの　力によるものなり

風師山早朝登山会は、この詩文を刻んだ石碑を風頭の岩に設置した。2013年に当時の森武昭JAC会長が風頭を訪問した際に、「今の若い人たちは槇 有恒と言っても知らない人が多くなってきたので、槇さんの略歴碑があればいい」と語られたことが発端となり、地元関係者の協力を得てステンレス鋼板の略歴碑が翌年3月に完成し、石碑の下の岩に嵌め込まれ、森会長出席の下で除幕式が行なわれた。17年からは毎年10月の第4日曜日に、北九州支部の主催として槇 有恒碑前祭が行なわれるようになった。

さて、第8回の碑前祭は、一時青空となった風頭で午前10時より行なわれた。竹本正幸支部長の挨拶に続いて、献花と御神酒奉納がなされた。来賓として本部の「引き継がれる山岳祭」の坂井広志リーダーの挨拶があり、創立120周年記念事業の一環として、全国13ヶ所で山岳祭が行なわれていることが紹介された。次いで地元の小田幸雄・門司歩こう会会長の祝辞が述べられ、谷延正夫・門司区区長の祝辞（代読）が披露された。さらにマナスル登山を支援した毎日新聞社西部支社・高添博之代表からの祝辞（代読）では、「今回は社用で参加できないが、来年は必ず参加したい」とのひと言が添えられていた。その後、全員で山の歌「山の友よ」を合唱し、記念写真を撮って式典を終了、下山した。

12時からは、門司港レトロ地区に近いふぐ会席料理店で食事会が開かれた。まず竹本支部長の歓迎の挨拶があり、その中で1972年6月、上高地の五千尺ホテル前のテーブルに槇と小西政継が座っているのを偶然見かけ、写真を撮ったというエピソードが披露された。続いて、いわばこの碑前祭の立役者であり、毎回参加している森元会長の祝辞が述べられた。

乾杯の後、来賓として慶應大学山岳部OBの吉川正幸会員が、槇と接したことのある後輩として、槇が立ち上げた山岳部の組織の様子が述べられた。続いて現在、茅ヶ崎市にお住まいの槇のご長男・槇 恒治氏（91歳）からのお手紙が披露された。父親のエピソードがいくつか綴られていたが、病床にある父親を見舞ったときに、「僕は3つのレコードを持っているんだよ」と言った元気な姿が忘れられないと言う。その3つとは、アイガー東山稜、マウント・アルバータ、マナスルなどの初登頂であるのは言うまでもない。

懇談が尽きないなか、副支部長の閉会の辞をもって会はお開きとなった。

終了後、記念碑を囲んで記念写真に収まる参加者たち

創立120周年記念事業■引き継がれる山岳祭13

宮崎ウェストン祭（11月3日・4日）

宮崎支部長　日高研二

「第37回宮崎ウェストン祭」が高千穂町との共催で11月3日、五ヶ所高原・三秀台において開催された。三秀台は九州の秀峰、祖母山と阿蘇山、久住山の三山を一望できることから「三秀台」と命名されており、雄大な山岳風景が展望できる。

今回は開催前に台風21号が発生し、九州直撃の予報もなされたことから大変心配されたが、当日は雲一つない秋晴れのすばらしい天候に恵まれ、無事開催することができた。この日をイベント日に決められた先達に敬意を表したい。

さて、この宮崎ウェストン祭は、日本アルプスを世界に紹介した「日本近代登山の父」として知られるウォルター・ウェストン師の遺徳を偲び、山岳遭難者に哀悼の意を表して登山の安全を祈ることを目的に開催している。

そのウェストン師は、日本アルプスに登られる1年前、明治23（1890）年11月6日、祖母山に登頂されており、イギリスに帰国後、発刊された『日本アルプスの登山と探検』（邦題）では、日本アルプスに先駆けて紹介され、その展望のすばらしさを讃えられている。ウェストン師が祖母山に登頂されて今年が134年目となり、多くの方々の参加を得て、こうして検証できることは誠に意義深いものがある。

式典は、午後4時から県内外80余名の参加の下、小学校児童による点鐘に始まり、遭難者らへの黙祷、小学校児童・当支部会員による献花、主催者（高千穂町・日本山岳会宮崎支部）挨拶、来賓（高千穂町議会議長）挨拶と進み、その後「ウェストン師に捧ぐ」詩の朗読（当支部）、次にウェストン祭の歌（指揮：当支部）を参加者全員で声高らかに合唱し、児童への記念品贈呈後、五ヶ所公民館館長の万歳三唱で終了した。

今年で40年目を迎えるが、当支部としても、県内外から多くの方が参加いただけるよう取り組んでいきたい。先達の思いのこもったこのウェストン祭が次の世代にスムーズに引き継がれ、地域や登山愛好者などの方々との交流もさらに深められ、今後、さらにこの地域の活性化や高千穂町の発展の一助になるよう願っている。

三秀台にそびえる巨大なウェストン記念碑

式典終了後、会場を五ヶ所野菜集出荷場に移して、午後6時から地元地区主催で交流会が開催された。まず神事で安全登山祈願。主催者・来賓の挨拶後、アトラクション。ステージで伝統芸能の神楽や歌唱、ギター演奏（熊本支部）、本陣太鼓、そして、今年新婚ご夫妻の点火による巨大キャンプ・ファイヤーと続き、地元の方が準備されたうどんや青竹を切ったコップでのカッポ酒などをいただきながら交流も深められ、有意義な時間を共有することができた。地元の方々に心から感謝である。

交流会終了後、九州各支部との懇親会を、宿泊所となる「ひめゆりセンター」で開催。始めに各支部による情報発信の場を設け意見交換をした後、歓談となった。翌4日は自由登山となっており、祖母山登山口は朝早くから駐車場は満杯状態で、登山者も多く見受けられた。

なお、本部山行委員会の柳田泰則会員は3日から式典にも参加されており、4日も一緒に祖母山周遊コースを登山していただいた。

式典終了後、九州各支部の参加者で記念写真を撮影

創立120周年記念事業■引き継がれる山岳祭14

木暮理太郎翁を偲ぶ会（11月3日）

群馬支部長　根井康雄

前夜までの大雨も上がり、見る間に晴天が広がっていく。晴れの特異日と言われる11月3日はまた、木暮理太郎翁の足跡を語り継ぐ会（服部佳郎会長）による「木暮理太郎を偲ぶ会」が開かれる日でもあるが、今年もまさに〝偲ぶ会日和〟となった。

この偲ぶ会は、群馬県太田市の北西部、日本山岳会第3代会長の木暮の生家がある強戸（ごうど）地区寺井町の田園風景の中に立つ「木暮理太郎翁生誕之地の碑」の前で行なわれる。群馬を代表する名山の赤城山を北西に大きく見上げ、東方近くには丘陵状の太田金山（かなやま）も望めるが、周囲は関東平野北端の平坦地。このような広々とした場所で行なわれる「山岳祭」も珍しいと思う。

顕彰碑を囲み参加者一同で記念撮影

木暮は1873（明治6）年12月、この地に生まれた。小島烏水初代会長と同年生まれである。6歳のころ、背負われて赤城山へ登り、13歳のとき富士講に加わり、富士山に登っている。17歳で上京し、府立尋常中学校から私立郁文館中学校に転校。卒業後、第二高等学校（仙台）を経て東京帝国大学に学んだ。

日本山岳会への入会は山岳会創立から8年後の1913（大正2）年だが、翌年には幹事に就いている。35（昭和10）年、第3代会長となり、在任中の44年5月に逝去した。そして51（昭和26）年、日本山岳会などの手により、木暮が愛した奥秩父の金山平にレリーフが建立された。台風の被害により60年に移築再建され、同年10月に第1回木暮祭が行なわれた。以来、毎年10月に山梨支部など3者による木暮碑委員会により「木暮祭」が執り行なわれている。

太田市にある「生誕之地の碑」は78（昭和53）年11月3日、地元の強戸山岳会によって立てられ、以来、強戸山岳会員が理太郎翁の遺徳を忍んできた。さらに2010（平成22）年、地元太田市で、次の世代に顕彰活動を継承するための「木暮理太郎翁の足跡を語り継ぐ会」が発足し、各種事業とともに、木暮理太郎を偲ぶ会として碑前祭を実施してきた。そして、2013年に設立された日本山岳会群馬支部も、今年から共催という形で第3代会長の顕彰に本格的に加わることとなった。

当日11時から開かれた偲ぶ会には、語り継ぐ会の関係者と日本山岳会群馬支部、そして、本部から「引き継がれる山岳祭」の坂井広志プロジェクト・リーダー、山梨支部から北原孝浩前支部長ら2名が、さらに群馬県山岳・スポーツクライミング連盟からは吉田直人会長も駆けつけ、顕彰碑前に20人余りが集った。

木暮家当主の木暮祐司氏による献酒、参加者全員による献花、来賓挨拶、語り継ぐ会の深沢直久氏による献杯の後、会場を近くの和食レストランに移して、昼食会を兼ねた懇談会「煮ぼうとうを食べる会」が持たれた。名称を「生誕祭」とすることなども話題に上り、来年度へ向けて参加者の気持ちの高まりを強く感じることができた。

群馬支部としても、地元の語り継ぐ会と手を携え、日本山岳会がコミットする14番目の山岳祭として、第3代会長木暮理太郎の顕彰事業を末永く引き継いでいく決意を新たにした。

式典後は「煮ぼうとうを食べる会」で懇談

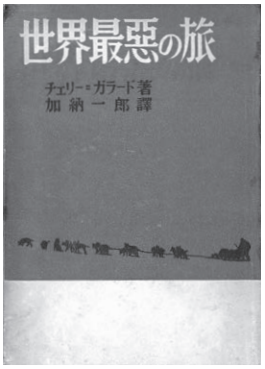
連載■文庫本でも楽しめる

山の名著再読

⑶1『世界最悪の旅』（C・ガラード著・朋文堂）

神長幹雄

本書は、南極点初到達に懸けたイギリスのロバート・スコット隊長ら5人の遭難を、数少ない生存者の1人である元隊員が綴った壮絶な記録である。南極探検の歴史から始まり、夏の行進や冬の行進など厳しい極地行の記述が続き、5人の踏査隊が大変な苦労の末に南極点に到達した。しかし、極点には先行者のソリの跡やノルウェーの国旗が立っていたという。失意のうちに帰還の途につくが、凍傷や燃料の欠乏などで次々と遭難死してしまうのだ。その劇的な全貌が、若い生物学者チェリー・ガラードによって明らかにされていく。邦訳の初版本（加納一郎訳）は1944（昭和19）年の発行。



昭和19（1944）年初版発行

1911年、南極に向かったスコット隊のほかにもう1隊、ロアール・アムンセン隊長が率いるノルウェー隊が行動中で、両隊はまさに「初到達競争」の観を呈していた。そのため後世になって、何かにつけて両隊は比較され、いくつかの指摘から評価が分かれることになる。たとえば、スコット隊は海軍出身の厳格な隊長に対し、経験豊富な極地冒険家という2人の性格の違い。スコット隊は動力ソリや馬などを移動手段にした大部隊だったのに対し、アムンセン隊は犬ゾリを活用、機動力に重点を置いた運営方法の違い。上陸した地点も異なり、さらに先発したスコット隊に後発のアムンセン隊が、北極圏を目指すと見せかけて南極に向かうなど、出だしから大きな波乱含みであった。

そうした批判や疑問に応えるような形で、10年後に発刊された記録が『世界最悪の旅』である。十分な反省と多くの批判を受けた末の記述だけに、豊富な資料を駆使しながら冷静かつ客観的な分析が行なわれる。特に最後の「遭難の批判」は、装備や資金力、貯蔵の油の問題など、事実をありのままに伝えようとする一貫した姿勢の下に、臨場感あふれる記述が続く。

今から10年ほど前になるが、アラスカのデナリに登りに行ったことがある。長いキャンプ生活に持参する書籍の選定は重要で、文庫1冊に絞ることにした。そこで手に取ったのが、アルフレッド・ランシングの『エンデュアランス号漂流』（新潮文庫）だった。スコットの探検から2年後、アーネスト・シャックルトンを隊長とする28名は、初めての南極大陸横断を試みたが、氷に阻まれてエンデュアランス号は漂流してしまう。寒さ、食料不足、病気、様々な危機に直面しながらも、17ヶ月の漂流を経て、全員が奇跡的な生還を遂げる。その読後、次に手に取った本が『世界最悪の旅』だった。

『エンデュアランス号漂流』といい『世界最悪の旅』といい、極地を取り巻く冒険記はなぜこうも心を騒がせるのだろう。当時、南極へ向かうのは死地に挑むようなもの。彼らの動機付けが気になるが、探検記にその答えがあるはずだ。

関連本で言えば、本多勝一氏の『アムンセンとスコット』（朝日新聞社）は、両者の冒険を比較しながら、熱意や運営など2つの個性が演じた「冒険レース」を分かりやすく解説してある。また、『世界最悪の旅』の完訳本も出版されている。スコットの南極探検の全貌を中田修氏が完訳し、図版類も全て収録され、訳注も細かく、750ページもの大冊となっている。

南極探検という100年前の出来事が、何冊もの書籍や映画となって語り継がれていく。名著と言われる所以（ゆえん）であろう。悲劇の遭難記であろうが生還記であろうが、人間の精神（こころ）に響くものが根底にあるからに違いない。記録に留められたことの偉大さ、ノンフィクションの力の結晶と言えるのではないだろうか。

文庫版は中公文庫（2002年初版発行、税込み920円）で読むことができる。**（図書委員会委員長）**

㉜『スウィス日記』（辻村伊助著・梓書房）

木根康行

『スウィス日記』『ハイランド』の著作で知られる辻村伊助は、登山家であり農園経営者であり、高山植物についての研究者でもあった。初期の日本アルプスに足跡を残し、英国のハイランドを旅し、日本人で初めて本格的な欧州アルプス登山の記録を残した人である。

私が辻村伊助という人を再認識したのは、2013年に小田原文学館で開催された「特別展　辻村伊助～アルプスに挑んだ小田原の登山家」の開催であった。日本山岳会からも資料を貸し出しすることとなり、図書委員会メンバーで同展を見学した後、伊助ゆかりの地である小田原市の辻村植物公園や終焉の地となった箱根湯本の居宅跡を訪ねた。

本書は、日本山岳会の機関誌『山岳』第十年一号の「日本山岳会設立十周年記念号」（1915年）から4回にわたって連載されたものがまとめられて、22年に単行本として横山書店から出版（横山書店版）された。これが伊助存命中の唯一の著書となる。その後、23年に起こった関東大震災の際に箱根湯本の居宅の裏山が崩壊して土石流に埋まり、伊助は一家全滅の非業の死を遂げる。3年後に遺体とともに発見されたスイス再旅行を綴った遺稿「続スウィス日記」が加えられ、前回の削除分も全て採録されて、30年に松方三郎、藤島敏男の編集により梓書房から再出版される（梓書房版）。これが今日、『スウィス日記』の底本とされている。著者撮影の35枚の写真とともに武田久吉、高野鷹蔵、小島烏水の追悼文が収録されている。

昭和5（1930）年初版発行

伊助は小田原の資産家の次男として生まれた。一高在学中に会創立の翌年に当たる06年に「山岳会」（現・日本山岳会）に入会（会員番号74番）、日本アルプスを中心にパイオニアワークの一翼を担った。東京帝国農科大学で農芸化学を学び、卒業に当たって1年間の欧州旅行を許され、園芸の研究とアルプス登山を目的に13年10月、日本を旅立つこととなる。費用は実家が山林を売却して工面したという。

敦賀から日本海を渡ってシベリア鉄道で欧州入り、ドイツ、オランダに滞在後、イギリス留学中の植物学者、武田久吉を訪ねる。翌年1月から2月に冬のスイスを巡り、ガイド2名とユングフラウ（4158m）とメンヒ（4099m）に挑み、日本人として最初に厳冬期の欧州アルプス4000m峰登頂を果たした。

その後、オーストリアを経由して再びイギリスに向かい、スコットランドの「ハイランド」を旅する。スカンジナビア、ドイツを回って近藤茂吉とともにスイスに入り、グロース・シュレックホルン（4078m）登頂に挑む。

しかしながら、登頂を果たした下山中にガイドを含め4人は雪崩に流され遭難。3時間かけて登った所を2分で押し流されたが九死に一生を得た。インターラーケンの病院で入院治療を受けるが、看護師のローザ・カレンと恋仲になり、結婚手続きを済ませ一緒に帰国する。

『スウィス日記』は、これら一連の欧州旅行のうち、スイスやアルプス周辺の旅と遭難、療養までを著したものである。その文章は詩的で、リズミカルに綴られるが、山の展望をはじめとする描写が細やかで、かつ随所に洒落やユーモア、皮肉も見られ、気になった事柄については批判をも浴びせる。しかしながら、山岳登頂部分においては、現代の登攀記録に劣らない醍醐味が味わえる。

本稿を引き受けるに当たり、私は再び伊助ゆかりの地を訪れた。妻ローザや三児と幸せな日々を過ごしていた伊助を襲った、37歳での非業の死。雪崩には生かされたが、山津波に命を奪われた、その悲劇性を感じながら晩秋の箱根湯本を歩いた。

『スウィス日記』（1998年初版発行、税込み1430円）は、『ハイランド』とともに平凡社ライブラリーに収められている。また、伊助の生涯を描いた中里恒子の小説『忘我の記』（文春文庫）の併読もお勧めしたい。

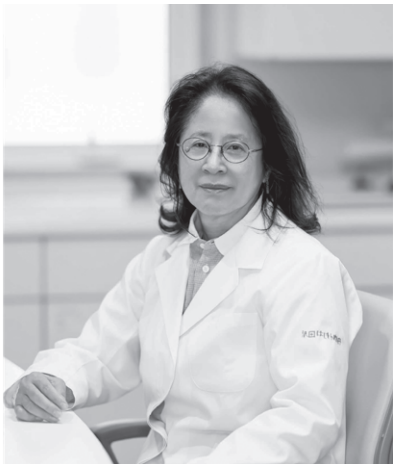
（図書委員会委員）

REPORT

本会橋本しをり会長が米国の山岳雑誌『Alpinist』に登場

国際委員会委員長　和田 薫

アメリカの山岳雑誌『Alpinist』87号（２０２４年秋号）の「ローカルヒーロー」というセクションに、日本山岳会の橋本しをり会長について寄稿したので、その概要や背景を紹介したい。



LOCAL HERO

Kaoru Wada on Shiori Hashimoto

At 4:30 a.m. on August 26, 2023, in the dawn light, Shiori Hashimoto addressed forty women as they prepared to hike out of the mountain hut on Mt. Fuji where they'd spent the night at 2790 meters. "Let's take the first step slowly; don't push yourself too much," said Hashimoto. Shortly after they began to walk, a beautiful sunrise illuminated their faces.

These women are members of Front Runners Climbing Club (FRCC), founded by Hashimoto. Half of them are cancer survivors, and the rest are medical or mountaineering supporters. FRCC has long been a passion for Hashimoto, who recently became the first woman to chair the Japanese Alpine Club.

The FRCC group scaled Mt. Fuji in 2023 to commemorate the twentieth anniversary of a joint climbing event between Japan and the US in 2000. (The event was delayed three years because of the Covid pandemic.) Nearly 500 people, both cancer survivors and supporters, participated in that climb two decades ago.

During that event, Hashimoto served as a medical supporter. She measured the quality of life of the participants before and after the climb, and they showed better scores afterward. With that information, Hashimoto founded FRCC to improve the quality of life of cancer survivors through mountain activities. For over twenty years, she has organized or joined monthly hiking events for its eighty members.

Hashimoto began mountaineering in middle school, and after entering Tokyo Women's Medical University, she became more involved in snow and rock climbing with the university's climbing club. She received support from Michiko Imai, a graduate of the medical school and the first woman to climb the three major north faces of the European Alps. While going to the mountains a lot with her club mates, Hashimoto often climbed with men, underscored by gender differences.

After starting her medical career, she became busy and spent less time in the mountains. However, in 1983, she joined a women's team led by Junko Tabei—the first woman to climb Chomolungma (Mt. Everest), in 1975—and the team made the first ascent of Sepu(ou Kang (5,500m) in Bhutan.

"It was obvious that men are usually stronger in mountains, and I learned that I could climb more difficult routes when with male climbers," said Hashimoto. "However, I found it more important to get more satisfaction from the climbing by having everything done by women."

In 1988, she led an all-women expedition on Gasherbrum II (8,035). As the leader, Hashimoto made every effort to get as many members as possible to the 8034-meter summit. Five members, including her, made it to the top. Up to then, traditionally, Japanese expedition style was mainly to go with a large number of climbers, but only one or two could reach the summit, while others supported the ascent by setting fixed ropes on the route or carrying loads. Hashimoto takes pride in this expedition because all 16 members reached the top and, of course, everyone made it home safely.

Mayuri Tajiri, a supporting member of FRCC who was part of the G2I team in 1988, has climbed mountains with Hashimoto since 1983. "It was a challenging time to do anything by women, let alone clients. Because she was a reliable leader, we could follow her and succeed together," Tajiri said of Hashimoto.

After studying experimental immunology at Cornell University, Hashimoto returned to mountaineering and founded FRCC. She led a joint Japanese and Chinese women's team to the summit of Cho Oyu in 2002 and another joint women's expedition to Everest in 2005.

Hashimoto recently embarked on a new journey, becoming the first woman to chair the Japanese Alpine Club (JAC) in its 128-year history. Former JAC chairman Kiyoshi Furusawa explained the reason why he appointed her: "It's true that there is the need of the times to promote women, but despite the gender, she was the most suitable person for our new chairperson because of her experiences and leadership."

She has already initiated projects such as sharing knowledge about climbing safety with elderly members and developing leadership programs for female members. She said, with a smile, "It's a responsible role, but I just want to enjoy it."

[This Page] **Author Kaoru Wada.** [Inline Right, 1 Facing Page] **Shiori Hashimoto poses for a portrait in her medical uniform, showcasing her strengths outside of the mountains.** **Throughout her career, Hashimoto has combined her passion for mountaineering with her knowledge and training as a medical doctor.** Yuki Gunzaki

Alpinist 94

『Alpinist』誌は、季刊（年４回）の本格的な山岳雑誌として知られ、ＪＡＣの図書室が唯一継続購入している海外雑誌でもある。その中で「ローカルヒーロー」は、毎回各国の書き手が自分たちにとってのヒーロー、ヒロインを紹介するコーナーである。

さて、今回寄稿に至った経緯は、昨年の82号（２０２３年夏号）でクスム・カングル（ネパール・ヒマラヤ、６３７０ｍ）の特集をするから、過去の日本人遠征についてリサーチを手伝ってほしい、とＪＡＣの国際委員会に問い合わせがあったことに始まる。

編集者からは大変細かく、登頂に至らなかったものも含めて何度も質問が飛んで来た。そのたびに私は図書室に通い、当時の雑誌や資料をめくって回答した。アルパイン・スタイルで登った馬目弘仁さんと青田浩さんに自身のクライミングについて書いてもらい、ＪＡＣ経由で知己を得た在日英国人に翻訳してもらった。こうして、ＪＡＣで出会ったご縁とリソースをフル活用してページが完成した。

そして、「また日本のことを書いてほしい」と編集者からありがたい依頼をいただいたのである。

話を聞いて、すぐに私は橋本さんのことを思い浮かべた。早速お時間をいただいてお話を伺い、橋本さんが２０００年に日米のがん経験者との合同富士山登山に医療サポーターとして参加し、その活動から派生して団体（ＦＲＣＣ）を立ち上げ、毎月の登山活動を20年以上にわたり継続していることを知った。昨夏に行なわれた合同登山の20周年イベントも見学させてもらったが、アメリカからの参加者も含めて再会を喜ぶ様子は、まるで高校の同窓会のようなにぎわいであった。

記事の中では、１９８８年のガッシャーブルムⅡ峰での女性遠征隊隊長としての経験から現在まで共通する橋本さんのリーダー・シップのスタイルについて、関係者のコメントも交えて触れた。もちろん、ＪＡＣ会長就任のこと、ＪＡＣで立ち上げた女性リーダー育成の同好会についても。

橋本さんのお話を伺いながら、ご本人は直接おっしゃらなかったが、私は彼女の登山活動の根底にあるシスター・フッド（女性同士の連帯）を見出しており、それを軸に書こうと決めていた。橋本さんの先輩である田部井淳子さんや今井通子さんとともに登って培われた経験が、その後の自身が率いたヒマラヤ遠征や富士山登山の仲間たちに、まるでリレーのバトンのように引き継がれていく様子を描きたかった。うまくいったかは分からないが、海外の読者にも橋本さんの人となりと、これまでの活動が伝えられたら、と心を込めた。

『Alpinist』誌は構成も優れており、ぜひ過去の号も含めてＪＡＣの図書室でお手に取っていただきたい。また、国際委員会は、前述のとおり過去の日本人のヒマラヤをはじめとする海外遠征についての海外からの問合せにも、日ごろから対応している。そのたびに図書室や司書の田村典子さん（当時）や先輩会員の方々のお知恵をお借りしているので、この場を借りて感謝を申し上げたい。

西北 東南

N

S

会員の皆様のご意見、エッセイ、俳句、短歌、詩などを掲載するページです。どしどしご投稿ください。（紙面に限りがありますので、1点につき1000字程度でお願いします）

芥川龍之介の写真発見〈下〉

牛丸　工

上高地で撮影された絵葉書の登山者は果たして芥川一行なのか――。

当時の写真機は高額で重量があり、徳本峠を越えて山奥の上高地に向かうのは相当な重労働で難儀することから、この時期の上高地周辺で撮影された写真は数えるほどしかない。該当する期間で、撮影時期と撮影者が特定できているのは、以下のようである。

①明治41年夏、高野鷹蔵が上高地・河童橋を撮影したものが42年発行『山岳』第五年一号に掲載

②42年春、上高地温泉場の主任に新たに就任した加藤惣吉が従業員と一緒に集合写真を撮影

③42年8月15日に鵜殿正雄と一緒に前穂高岳へ登った加山竜（龍）之助が朽ち果てた三角点櫓で同行者の記念撮影

④43年、辻村伊助が河童橋および焼岳を撮影

⑤44年7月21日、ドイツ人Steinitzerが河童橋と焼岳を撮影

⑥45年6月23日、大森房吉調査団

一行は上高地で調査。ほぼこの絵葉書と同じ場所で撮影された写真があり、噴煙が薄くてよく見えないが、同日別な場所で撮影された写真では噴煙は頂上付近から出ている。

この程度しか見付けることができない。

改めて絵葉書の写真を見てみる。撮影者の狙いは人物ではなく、高原の雰囲気を出すためにシラカバの樹を数本入れ、噴煙（水蒸気）全体が画面に収まるような焼岳である。人物がいなければ見事な構図である。構図が決まったところへ5人組とひとりのボッカらしき者が通りがかったので、撮影者は「兄ちゃんたち写真を撮ってあげるから、並んで」と言って、道に並んだら焼岳が切れてしまうので、構図に収まるようにヤブの中に5人を誘導した、と思えるような構図と人物の配置である。

もし5人の中の1人が写真機を所有していて、自動撮影状態で撮影するならば、写真はこの上なく貴重で、旅の記念にするには人物をもっと大きく、しかもきれいに並んで撮影するものである。しかし、そうではなく、5人は半分ヤブの中、和服の1人がポツリと道に立っている。明らかに撮影者の狙いは焼岳の噴煙である。しかも撮影者が、2日後に前穂高岳で三角櫓の撮影をしている加山竜之助だとしたら、8月13日はまだ山に登っておらず温泉場に滞在していたので、芥川一行と接点は十分にあるのだ。当時の写真は現在のデジタル写真と異なり、相当大きく引き伸ばすことができるので、この絵葉書をスキャンして、顔の部分を引き伸ばし拡大してみると、5人のうち手前の半腰の人物が芥川龍之介のように思える。今回の槍ヶ岳登山を言い出し、主導したのは芥川であるから、山行のリーダー的存在は芥川であり、メンバーはリーダーを取り囲むように並んだ構図であるとも言える。

では、加山竜之助がいかなる人物であるか、詳細は不明である。しかし『書物展望』16（2）（164）1949-04という雑誌に「（小島）烏水氏の追憶」という文章を寄せている。小島烏水は日本山岳会創立会員7人のうちの1人で初代日本山岳会会長であるから、山岳関係者であることは間違いないと思う。また、松本周辺在住の信州人ではないかと思う。明治から大正初期にかけて松本には数軒の写真館があったが、ガラス乾板から絵葉書へ印刷する技術はないらしく、絵葉書印刷の多くは東京・本郷の矢吹高尚堂で印刷し、販売は松本市内にあった鶴林堂書店か明倫堂書店で扱われていることが多く見られる。この絵葉書も印刷は矢吹高尚堂、販売は鶴林堂書店となっていることから、加山は信州人のような気がする。

当時の状況を再現してみる。

明治から大正にかけて、北アルプス最強の案内人と呼ばれていたのが上條嘉門次・嘉代吉親子であ

った。その嘉代吉を案内人に当時府立三中の生徒であった芥川龍之介・中塚癸巳男・中原安太郎・市村友三郎・山口貞亮の5人は明治42年8月12日、槍ヶ岳登頂を終え、午後3時ころ当時上高地にあった唯一の宿、上高地温泉場に到着した。その嘉代吉の到着を待っていた人物がいた。鵜殿正雄である。

鵜殿は現在の長野県小諸市に生まれ、木曽山林学校の3回生であり、新鋭の登山家として数々の登山記録を残しているが、このときはこれから奥穂高岳～槍ヶ岳の初縦走を狙って、案内人を嘉代吉に依頼すべく、温泉場で準備して嘉代吉の戻りを待っていた。鵜殿の縦走登山で参加者の加山竜之助は8月13日、焼岳撮影の際に撮影現場を通りがかった府立三中生徒5人を焼岳を背景に撮影した。嘉代吉を案内人に雇った鵜殿一行は8月15日の朝、温泉場を出発し、その日前穂高岳山頂の三角点設置の櫓で加山が写真撮影をした。一行は無事縦走を成し遂げ、鵜殿はその記録を43年3月31日発行『山岳』第五年一号に「穂高嶽槍ヶ嶽縦走記」として寄稿している。

以上より導かれる結論は「この絵葉書の写真が撮影された日は明治42年8月13日であり、撮影者は加山竜之助で、写っている学生風の人物5人は当時府立三中の学生であった芥川龍之介たちの一行である期待値は99％。手前で少ししゃがんだ姿勢の人物が芥川である確率は25％である。

明治38年10月14日の高頭仁兵衛

南川金一

明治38（1905）年10月14日は山岳会が設立された日である。この日について、『日本山岳会百年史』は「この日に日本博物学同志会の例会が開かれ、その例会が終わった後、武田、高野、梅澤、河田、小島、高頭、城が集まって、山岳会設立の発起人会が開かれた」と書いたので、それが定説となった。

ところが、その日には高頭仁兵衛は乗鞍岳に登るために岐阜県にいて、東京には不在であった。『山岳』第百十九年（2024年）掲載の「乗鞍岳大量遭難と高頭仁兵衛」で木下喜代男氏がそのことを明らかにした。高頭仁兵衛が『山岳』第一年第一号に書いた「飛信界の乗鞍ヶ嶽」は、文体が古いこともあって、文章が分かりにくいのだが、執筆者は飛騨山岳会の人とあって、強い関心を持って読んでくれた。

私は高頭のこの文章を読んではいたが、高頭仁兵衛が木標に書いた「明治三十八年十月十八日」という日にちにまでは注意が及ばなかった。

『日本山岳会百年史』の記述の裏付けは、創立60周年記念講演会における武田久吉の講演「山岳会創立前後」（『山岳』第六十一年に掲載）において、「明治三十八年十月十四日、博物学同志会の小集会をやった。……それが済んでから飯田町の停車場に近い富士見楼の楼上へ七人集まって最後の相談をして、……山岳会が結成された」と述べているほか、武田久吉が書いた追悼文「高頭君の想い出」（『山岳』第五十三年）の「その年（明治三十八年）の一〇月一四日の午後、飯田河岸にあった富士見楼の楼上で、高頭、小島、城数馬、高野、梅沢、河田の諸君と私とが集って……」によるものであった。

歴史上の事実に関する解明は、できることならば傍証・反証を探し出して確認するべきである。しかし、明治38年10月14日の、発起人になる7人の集まりについて書いているのは武田久吉だけであり、武田以外の6人は、誰もこの日について書いていない。多くの文章を残した小島烏水も書いていない。高頭仁兵衛も、その日の打ち合わせに出ていなかったことを明らかにしていない。

武田久吉といえば記憶力抜群、書いたものは正確と、誰しもが認めるところであり、百年史委員会では『百年史』編纂に当たって、武田久吉の証言を重要視した。

博物学同志会の機関誌『博物の友』第5年第29号（明治38年11月25日発行）に、明治38年10月14日の第13回例会の報告記事が載っていて、山岳会設立発起人メンバーのその日の出席者は高野、武田、河田、梅沢の4人であったことが裏付けられる。例会の会場は飯田町の稚松（わかまつ）小学校で、通常午後2時から2時間くらい開かれていた。富士見楼へは10分もかからない距離である。したがって、富士見楼での山岳会設立の打ち合わせには、例会終了後この4人が揃って向かい、城と小島はそれぞれに会場に向かった

ことになる。武田久吉は『博物の友』の記述が頭にあり、一方で、7人全員が富士見楼に揃っていたと思いこんでいたようだ。

記憶違いや、思い違いは誰にもあるもの、と改めて思う。

山岳会設立当時について、志村烏嶺（寛）の証言がある。高頭仁兵衛からの資金的援助について、城数馬は「その話を信じてよいのか」と慎重だった。弁護士であるから当然である。確認のため新潟へ高頭仁兵衛を訪ねるべく、途中の長野で志村烏嶺に会って相談したところ、志村は高頭の人柄に太鼓判を押すとともに、高頭に電報を打って長野に呼び寄せた。そこでの結論が、高頭が山岳会に「向こう十年間、毎年千円を提供する」というものだった。その相談の時期を、志村烏嶺は「（明治三十八年）十月下旬」と書いている（『山岳』第五十年「日本山岳会創立前後之見聞」）。10月14日には、発起人の7人が全員揃っていたのに、資金援助という大事な話について、なぜその場で高頭に直接確認しなかったのか。10月下旬という志村の証言の時日に、私は疑問を感じていた。

しかし、高頭仁兵衛がその場にいなかったので、資金援助の話を直接本人に確認することができず、確認のために城が高頭に会いに行くと言い出し、10月下旬に訪ねたとあれば、志村の話はつじつまが合う。

（元百年史編纂委員）

活動報告

日本山岳会の
各委員会、同好会の
活動報告です。

自然保護委員会――

2024年度 自然保護全国集会

今年度の自然保護全国集会を11月3日(日)～4日(月)に行ない、本部、首都圏、9支部より31人が参加した。初日はTKP新宿カンファレンスセンターで、千葉大学の竹内望教授より「雪と氷にすむ不思議な生きものたち：雪氷生物の世界」と題する基調講演をしていただいた。その後、各支部の自然保護担当の委員が活動報告を行なった。翌日は新宿御苑で「都市に暮らす人々が求める自然とは―新宿御苑に学ぶ」と題してフィールドスタディを行なった。菊花壇などに長く携わってきた自然保護委員会の池田理事と、新宿御苑の歴史に詳しい久保田委員が案内した。

竹内先生は、低温で苛酷な環境である積雪や氷河にも、低温環境に適応した多様な生物が生息し、独自の生態系が成立していることを紹介してくださった。雪氷の上に繰り広げられる新しい世界を見せてくださった先生のお話は、参加者から大変好評であった。

次に支部報告を行なった。北海道支部は、大雪山高山植物盗掘防止パトロールや、美瑛富士避難小屋の携帯トイレブースの点検・清掃活動について報告された。

宮城支部からは、東日本大震災以降の復興事業が進められる中での問題について紹介された。

群馬支部からは、沼田市の玉原（たんばら）高原で行なった自然観察会について報告された。

埼玉支部からは、ニホンジカによる被害実態調査、森づくり活動、越生町の大高取山での自然観察会、埼玉県下の地形地質・動植物に関するシンポジウム開催について報告された。

東京多摩支部からは、山梨支部と連携した三ツ峠山アツモリソウ保護活動、片倉城跡公園や高尾山で行なっている自然観察会、登山道の維持管理に関する講演会を行なったことが報告された。

越後支部からは、弥彦山におけるフランスギク駆除活動、妙高・

新宿御苑での記念撮影

笹ヶ峰のオオハンゴンソウ駆除活動について報告された。

山梨支部からは、三ツ峠山アツモリソウ保護活動に加え、山梨県山岳連盟による高山植物調査活動や現状について紹介された。

信濃支部からは、上高地での散乱ごみの収集、啓蒙を兼ねての上高地巡回、外来植物の駆除や猿追いについて報告された。

関西支部からは、森づくり活動の一環で、大学と連携した調査活動、兵庫県・東おたふく山での草原復元活動への参画、大台ヶ原山の歩道保全活動などについて報告された。

本部は、今年度から東北大学が代表機関を務める「ネイチャーポジティブ発展社会実現拠点」に参画したことを報告した。そのほか、会報誌「木の目草の芽」の発行や、ほかの山岳団体との情報交換会を行なっていることを報告した。

今年度は連携支部の調整ができず、本部単独の開催となったが、来年度は越後支部と連携し、新潟県妙高市で開催予定である。

（自然保護委員会委員長・下野綾子）

科学委員会――2024フォーラム「登山を楽しくする科学XIV」報告

日本山岳会・科学委員会主催によるフォーラム「登山を楽しくする科学（XIV）」が、11月9日㈯、13時から17時、立正大学品川キャンパス・ロータスホールで開催された。参加者は、一般登山愛好家が31名、日本山岳会会員が12名、また科学委員会委員が20名（そのうち2名は講師）および講師1名で、参加者の総数は64名だった。司会は科学委員会の木曽雅昭事務局長が担当、科学委員会の松本敏夫委員長による開会の挨拶があり、その中で、講演予定者の須田知樹氏がやむを得ず欠席となった理由を説明し、急遽、元科学委員会委員長の福岡孝昭氏に講師を依頼した経緯を説明した。

講演1では「富士山ってどんな火山」、元立正大学地球環境科学部教授で日本山岳会の福岡孝昭氏から、①富士山の火口位置が北西および南東方向に偏りがあるのはプレート運動に原因、②現在の富士山は小御岳の上に古富士火山が重なり、その上に現在の富士山がある、③大沢崩れがどのようにできたか、今後の大沢崩れの姿と源頭部の砂防工事、④お助け小屋とお中道（富士講）、などに関する講演があった。富士山崩壊の過程を示す大沢崩れ源頭部の現状および歴史的変化、砂防工事は下流部での被害を防止するため、との説明があり、自然保護に興味がある参加者にも大変好評であった。

ロータスホール会場風景

講演2では、「スマホGPSで登山を楽しく～スマホGPSによってなにができるか、その楽しみ方～」と題して、日本山岳会の近藤雅幸氏（日本山岳会登山講習会・読図講習会の主任講師）から、①GPSとは・GPSで位置が分かる理由など、②GPSにはデバイスとアプリと地図が必要、③スマホ用GPSアプリの種類、④ジオグラフィカの使い方、などについて興味深い講演があった。登山初心者にとって、読図の必要性は十分に理解できてもマスターするのは困難である。スマホGPSアプリを利用することで、現在地の確認が容易になり、アプリにより今までとは異なった登山を楽しむことも可能になる、と指摘された。

講演3では、「チベット医学と祈り～山と薬草と仏教と、ダラムサラ10年の暮らし～」と題して、チベット医で森のくすり塾を主宰する小川康氏からは、①四部医典、②医学生の仏教的日課、③医学生と瞑想、④民衆と薬に関する講演があった。はじめに「タルチョ」を演壇の前に広げ、タルチョの意味や記載された文字の説明および通常は峠に掲げるものと指摘された。かつてチベット人が山に登るのは宗教的な祈りのためであり、登山を楽しむためではなかったことを改めて理解できた。特に印象的だったのは、数十日間にわたって山に入り、約50種類に及ぶ1年分の薬草を採取する医学生の日課には

深い感銘を受けた。薬草は薬になるだけではなく、香草の煙が仏様の供養になるとの考えがある。講演の途中にチベット語で真言や経文を唱えられ、その声量と神秘的な響きに圧倒される思いであった。

科学委員会ではフォーラム開催に際し、講師と会場に参加された皆さんとが活発な意見交換がなされ、講演内容の理解を深めることができたと思われる。最後に、設備の整った会場を使用させていただいた立正大学に感謝申し上げる。

（科学委員会委員長　松本敏夫）

山岳部・ワンゲル部の部報欠号補充について

図書委員会

図書室に所蔵中の学校関係の部報・会報類をリストにまとめて、図書委員会のホームページ上で公開中です。旧資料は入手困難で欠号が多く見られます。リスト上で欠号になっている資料をお持ちの方は、ぜひ図書室にご寄贈をお願いいたします。部報類は図書室で閲覧可能です。

＊資料照会先　図書担当・豊泉（とよいずみ）
☎03-3261-4433
jac-room@jac.or.jp

図書受入報告（2024年10月～11月）

著　　者	書　　名	頁／サイズ	発　行　者	発行年	寄贈／購入別
神尾重則	千の風になって ：神尾重則遺稿集	543p／20cm	山と溪谷社	2024	個人寄贈
鈴木利英子 ／鈴木遥	孤高に生きた登山家 ：岡野金次郎 評伝	367p／20cm	山と溪谷社	2024	個人寄贈
石川欣一	新編 可愛い山	496p／15cm	山と溪谷社	2024	出版社寄贈
加藤芳樹	六甲山55コース ：決定版ガイドブック	168p／21cm	山と溪谷社	2024	出版社寄贈
小松貴	裏山の奇人 ：野にたゆたう博物学/幻冬舎新書	344p／18cm	幻冬舎	2024	出版社寄贈
松永K三蔵	パリ山行	167p／20cm	講談社	2024	出版社寄贈
守屋益男	駅から登る岡山の山100座 2	221p／21cm	吉備人出版	2024	出版社寄贈
守屋益男	人はなぜ山へ登るのか ：登山四方山話	216p／21cm	吉備人出版	2024	出版社寄贈
太郎平小屋70周年記念誌編集委員会 編	太郎平小屋 ：70周年を迎えて	240p／27cm	五十嶋博文（私家版）	2024	編者寄贈
五十嶋一晃	薬師岳の頂き ：太郎平小屋70周年誌 別冊	172p／21cm	太郎平小屋70周年記念誌編集委員会	2024	著者寄贈
五十嶋一晃	薬師岳・奥黒部の博文 ：北アルプスど真ん中の自然と人を守る太郎平小屋グループのオヤジ	770p／21cm	五十嶋商事	2024	著者寄贈
溝手康史	山岳事故の法的責任 ：登山の指針と紛争予防のために	120p／21cm	デザインエッグ株式会社	2024	著者寄贈
山本明正	坊がつる讃歌 誕生物語 ：広島高師の人と人のつながりを追って	90p／21cm	Akimasa Net	2023	編者寄贈
沖﨑吉信 編	新宮山彦ぐるーぷ 創立50周年記念誌	46p／30cm	新宮山彦ぐるーぷ	2024	個人寄贈
建部雅史	山稜に遊ぶ	524p／19cm	株式会社パレード	2024	著者寄贈
日本山岳会広島支部 編	広島支部創立25周年記念誌 ：四半世紀を経て次の四半世紀を展望して	96p／30cm	日本山岳会広島支部	2024	発行者寄贈
日本山岳会東海支部 猿投の森づくりの会 編	猿投の森づくりの会 20周年記念誌	99p／26cm	日本山岳会東海支部	2024	発行者寄贈

会務報告

令和6年度第7回(11月度)理事会議事録

日時　令和6年11月14日㈭19時00分～20時55分
場所　集会室およびオンライン（Ｚｏｏｍ）
【出席者】橋本会長、永田・桐生・飯田副会長、長島・南久松・平川各常務理事、松田・川瀬・池田・望月・原田・猿渡・久保田各理事、清登監事
【欠席者】石川監事
【オブザーバー】節田会報編集人

【審議事項】
1・日本山岳会会員向けの団体登山保険の更新について（南久松）（賛成15、反対０）
2・秩父宮記念山岳賞（2件）の承認について（飯田）（賛成15、反対０）
3・創立１２０周年記念式典に海外から関係者を招待する案（国際シンポジウム）実施の可否判断について（桐生）（賛成15、反対０）
4・ブンギ隊へのＹＯＵＴＨ ＣＬＵＢ活動特定資産使用について（平川）（賛成15、反対０）

【協議事項】
1・評議員懇談会の内容について協議した（長島）
2・永年会員対象の特別功労会員の募集について協議した（永田）
3・年次晩餐会でのプンギ登山隊およびヒマラヤキャンプ登山隊の紹介について協議した（長島）
4・今後の創立１２０周年記念行事寄附の募集の進め方（手順）について協議した（長島）
5・令和7年度事業計画作成スケジュールについて協議した（長島）

【報告事項】
1・入会承認報告（橋本）
2・寄附金および助成金受入報告（南久松）
3・神奈川支部支部長代行の就任について（長島）
4・「木暮理太郎翁を偲ぶ会」について（桐生）
5・12月支部連絡会の関西支部による進め方について（長島）
6・令和7年度国有林の貸付・使用期間満了に伴う申請手続きについて（原田）
7・山の日ニューイヤーフォーラム２０２５への後援・広報依頼について（久保田）
8・東京支部設立進捗報告について（松田）
9・自然保護全国集会の開催報告（池田）

【その他】
1・「山」11月号の進行状況について（節田）

ルーム日誌 11月

1日　入会説明会
5日　スケッチクラブ
6日　山行委員会
7日　常務理事会　ＹＯＵＴＨ ＣＬＵＢ委員会　山岳地理クラブ
8日　図書委員会　登山講習会
11日　総務委員会　アルパインスキークラブ
12日　広報委員会　フォトクラブ
13日　財務委員会　かっぱの会
休山会　山想クラブ
14日　理事会　九五会
15日　記念事業委員会（国際交流）クニ塾
16日　博物館会議　アルバータ峰登頂１００周年プロジェクト
18日　総務委員会
19日　麗山会　アルパインスキークラブ（幹事会）　バックカントリークラブ
20日　記念事業委員会（引き継がれる山岳祭）つくも会　三水会
21日　科学委員会　山遊会
22日　自然保護委員会　みちのり山の会
25日　総務委員会　東京支部設立プロジェクト
26日　「山の日」事業委員会　00会
27日　評議員懇談会　子どもと登山委員会
28日　学生部
29日　記念事業委員会

30日　アルピニズムクラブ
11月来室者　304名

会員異動

物故

松澤節夫（8336）24・10・19
庄司駒男（4817）24・9・11
式　正英（5124）24・9・28
宮本貞雄（5746）24・9・19
横田春雄（8292）24・11・1

退会

鈴木快信（9831）
佐藤　弘（11440）越後
高橋淳男（16017）
加藤千明（16245）
東村緑子（16670）東海
岡野武司（17053）関西
市村裕子（17199）埼玉
西田智子（17205）関西
片野健太（17101）埼玉

訂正

・会報11月号（954号）13ページの新入会員（2024年10月）中、吉岡稔様の紹介者、川北博様とあるのは根井康雄様の誤りでした。
・同号16ページの図書紹介欄、『坂本直行論』の著者名、「平川禎治」とあるのは「早川禎治」の誤りでした。お詫びして訂正いたします。

【山岳会のヒトとモノ】講座

第3回「ナンダ・デヴィ縦走」開催のお知らせ

今回のテーマは、「ナンダ・デヴィ縦走」です。プロローグは、ロジェ・デュプラの有名な詩「いつかある日」を導入部に、音楽、映像、写真も含めて多角的な視点から「ナンダ・デヴィ縦走」を振り返ります。

「ヒト」については、加藤保男氏を中心に取り上げ、そのスーパースターとしての活躍を紹介します。また、「モノ」については、デュプラ隊のハーケンや加藤保男氏のピッケルなどを取り上げる予定です。

ナンダ・デヴィ縦走隊は、複雑な縦走計画を若い隊員に主体的に任せた点に特徴がありました。隊員の出身、年齢、社会的背景などにかかわらず、目的・戦略戦術・計画の進捗を全隊員で共有し、各隊員の異質な能力を最大限発揮できるようにしたものです。結果として、チーム登山の良さ、大学山岳部の長所などが引き出されました。

さらに、ヒマラヤ縦走登山の意義や特徴、困難性にも触れたいと思います。できれば、首都圏近郊のナンダ・デヴィ登山隊員にもご参集いただき、当時の想い出を語ってもらいたいと思います。

◆日時：2025年1月24日㈮
18時30分～20時30分
◆場所：日本山岳会ルーム104室およびリモート開催
◆方法：104室で対面の講演会を行ない、併せてリモート（Zoom）で配信する。
◆講師（ナビゲーター）：谷山宏典氏（ライター、日本山岳会）、古野淳氏（前日本山岳会会長）
協力者：鹿野勝彦氏（ナンダ・デヴィ登山隊隊長）
◆参加方法：事前の申込みは行ないません。以下のどちらかでご参加ください。
①会場での聴講希望の方：日本山岳会ルーム104室に直接お越しください。18時から受付を開始します。なお、先着順で定員は35名までです。
②リモート参加希望の方：1月20日㈪から山岳会ホームページ上でZoomのURLを公開します。
各自のPCなどで入室してください。18時から入室できるようにします。
◆問合せ：資料映像委員会（飯田）☎090－4683－2305
記念事業委員会エベレストPJ（神長）☎090－4124－1082
主催：公益社団法人日本山岳会資料映像委員会・記念事業委員会エベレストPJ

❖編集後記❖

●「類ひない岬の風光優雅な海岸線」――三島由紀夫の短編集『岬にての物語』でそう表現されている鵜原（うばら）理想郷を歩いてきました。本では「鷺原」となっていますが、舞台は勝浦市の「鵜原」とのことです。大正時代に別荘地として計画された景勝地で、与謝野晶子ら文人墨客が多く訪れています。

●鴨川市の内浦県民の森にて千葉支部主催で開かれた栃木・群馬・茨城との4支部合同懇談会の翌日歩いたのですが、小春日和の下、手弱女（たおやめ）平や毛戸（けど）岬、白鳳岬、明神岬などを巡り、ゴールは「日本の渚百選」の鵜原海岸へ。リアス海岸の地形や地層を眺めながら、道標に刻まれた晶子の歌も楽しめる、まさに〝理想的な〟シーサイド・ハイキングでした。（節田重節）

日本山岳会会報　山　955号

2024年（令和6年）12月20日発行
発行所　公益社団法人日本山岳会
〒102－0081
東京都千代田区四番町5-4
サンビューハイツ四番町
TEL　東京(03)3261-4433
FAX　東京(03)3261-4441
発行者　日本山岳会会長　橋本しをり
編集人　節田重節
E-メール：jac-kaiho@jac.or.jp
印　刷　株式会社　双陽社